

小学校教員の過去の部活動経験とストレス 対処能力との関連

井上 文夫・山内 雄貴*・山本 祥子**・森 孝宏***・浅井 千恵子****

Relation of Past Experience of Club Activities in School Life with Stress Coping Ability in Primary School Teachers

Fumio INOUE, Yuki YAMAUCHI*, Sachiko YAMAMOTO**, Takahiro MORI***, Chieko ASAI****

Accepted December 4, 2013

抄録: 教員のメンタルヘルスが問題となっているが、教員の過去の部活動経験がストレス対処能力にどのような影響を与えるかについては十分検討されていない。京都府内の小学校教員を対象として、ストレスとコーピングをアンケートにより調査した。ストレスについては部活動経験と関連はなかったが、コーピングについては部活動経験により有意差がみられた。とくに積極的行動得点は中学時に文化部、運動部に所属していたものは所属していなかったものより高値であり、高校、大学では差は少なくなった。また、中学から大学までに主将・副主将の経験を持つものでは、積極的行動得点は高値であり、部活動経験がストレス対処能力獲得に効果的と考えられた。

索引語: 小学校教員, ストレッサー, コーピング, 部活動

Abstract : Although the teacher's mental health problems are increasing, it is not examined enough whether club activity experience of a teacher's past has effects on stress coping ability. An investigation of stressor and coping was conducted by the questionnaire for the primary school teachers in the Kyoto Prefecture. Although there was no significant difference in the stressor scores among the past experience of club activity in school life, the significant difference was seen in the coping scores. Especially the positive behavior score in coping had marked difference at the time of junior high school, and its difference became less at the high school and the university. Moreover, positive behavior score was higher in those who had experience of a captain or a vice-captain even in a university from a junior high school. It was thought that experience of club activities in school life was effective for stress coping ability acquisition.

* 京都教育大学大学院教育学研究科

** 教育学部卒業生

*** 保健管理センター医師

**** 花園大学非常勤講師

Key Words : primary teachers, stressor, coping, club activities

1. はじめに

近年教員は多大なストレスを抱えており、文部科学省¹⁾の統計によると、2009年度において精神疾患で休職した公立学校の教員は5,458人、精神疾患による病気休職者の在職者に占める割合は0.6%であり、その推移に目を向けると、過去10年間連続で増加を示している。

学校教員は単一職種として最大数を占め、身近な職業である一方、極めて特殊な職業である。教員の職務には、「仕事に関係する人が多く、種類も多い」、「終わりが無い」、「急を要する」、「役割分担が明確でない」、「学校・市町村固有の教育方法がある」などの特徴があり、小・中学校教員の55%が“大変忙しい”と職務に多忙感を抱いている²⁾。

小学校教員は、親・子ども・同僚など様々な対人接触を必要とするため、対人ストレスの影響は大きいと想像され、不確定で、偶発性が高く、正解など決して出せない子どもたちの将来に関わる場合に、日々思考錯誤の中で関わりを模索せざるを得ない。そうした環境の中では、自分が関わった際、成果が見えにくくなった時に不安を感じ、思考錯誤が悪循環に陥ってしまうのは当然のことかもしれない³⁾。

一方、運動・身体活動の実施とメンタルヘルスの改善・向上効果との関連については多くの研究が行われている。上野ら⁴⁾は、運動部活動に所属している生徒は部活動に所属していない生徒よりも、ライフスキルを獲得していると報告している。

運動部活動によるメンタルヘルスや自己効力感への影響の研究はされているが、過去の部活動の経験が職業に就いた時にどのように有効に働くかという事を検討している研究は少ない。

本研究では、小学校教員を対象として、過去の部活動経験が小学校教員のストレス対処にどのように影響するのかを明らかにするため、学生時代のクラブ所属状況の他に、主将経験などの役職や現在の役職などを関連づけて調査を行い、若干の知見を得たので報告する。

2. 研究方法

1. 研究対象および調査方法

京都府内の小学校6校の常勤で勤務している教員150名を対象とし、100名からの回答を得た（回収率67%）。内訳は男子33名、女子67名であった。調査は2011年10月中旬から11月中旬に実施した。

研究方法は質問紙によるアンケート調査を実施した。各校の校長に調査を依頼し、対象者にアンケート用紙を配布してもらった。学校の選定は機縁法によった。アンケートは無記名とし、プライバシー保護のため一人一人に封筒を配布し、回答は密封されたものを回収した。

2. 調査内容

- 1) 部活動経験：中学校、高校、大学での部活動経験について、運動部、文化部、所属なしから選択してもらい、主将・副主将の経験の有無も質問した。
- 2) ストレッサー尺度：高木らの教師のストレッサー尺度⁵⁾を参考に作成した。ストレッサー尺度と

して、役割の曖昧な職務の負担に関する調査 12 項目、実施困難な職務の負担に関する 7 項目、役割葛藤に関する 11 項目、同僚との関係に関する 6 項目、組織風土に関する 11 項目を質問した。

- 3) コーピング尺度：庄司らの職業コーピング尺度⁶⁾のアンケート項目を参考に作成した。コーピング尺度として、積極的行動・認知に関する 10 項目、消極的行動・認知に関する 10 項目、症状対処に関する 10 項目を質問した。

3. 分析方法

統計処理には統計ソフト PASW Statistics18 (IBM) を用いた。ストレスサー尺度、コーピング尺度については、天井効果、フロア効果のみられた 14 項目を除外し、主因子法で因子分析を行い、バリマックス回転を行った。下位尺度の内的整合性の検討には、Cronbach の信頼性係数を用いた。平均値の差の検定には 2 群間では t 検定を、多群間の比較には一元配置分散分析を用い、多重比較には Bonferroni の検定を用いた。また、2 変量の相関に関しては、Pearson の相関係数の検定を用いた。いずれも、 $p < 0.05$ を統計学的に有意とした。

4. 倫理的配慮

調査はすべて無記名で行われ、回答したくない項目は回答しなくてもよいこと、調査に回答しない場合でも本人に不利益がないことを事前に伝えた。なお、本調査は本学の倫理委員会発足以前に計画されたものであり、また無記名による調査であったことから、研究倫理委員会による審査は行われていない。

3. 結果

1. 対象者の属性

対象者の平均年齢は 41.7 ± 12.7 歳であった。性別は男性が 33 名、女性が 67 名、配偶者のいるものが 62 名、いないものが 38 名であった。担任を持っている者が 73 名、持っていない者が 27 名であった。中学校の部活動経験では、所属なしが 22 名、文化部が 11 名、運動部が 67 名で、高校の部活動経験では、所属なしが 41 名、文化部が 18 名、運動部が 41 名で、大学の部活動経験では、所属なしが 41 名、文化部が 25 名、運動部が 34 名であった。中学校から大学までを通して、主将・副主将の経験のある者が 36 名、ない者が 64 名であった。

2. ストレスサー尺度とコーピング尺度

ストレスサー尺度とコーピング尺度 77 項目の平均値、標準偏差を算出し、天井効果およびフロア効果の見られた 14 項目を以降の分析から除外した。主因子法による因子分析を行ったところ、ストレスサー尺度では表 1 に示すように「曖昧な職務責任」「困難な職務負担」「役割葛藤」「同僚との関係」「過剰な要求」の 5 因子が抽出された。コーピング尺度では、表 2 に示すように、「消極的行動」「症状対処」「積極的行動」の 3 因子が抽出された。ストレスサー尺度の内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「曖昧な職務責任」で $\alpha = 0.880$ 、「困難な職務負担」で $\alpha = 0.875$ 、「過剰な要求」で $\alpha = 0.857$ 、「同僚との関係」で $\alpha = 0.897$ 、「役割葛藤」で $\alpha = 0.869$ と良好な内的整合性が確認された。ストレスサー尺度の 5 つの下位尺度得点の平均値 $\pm$ 標準偏差は、「曖昧な職務責任」得点 24.5 ± 5.6 、「困難な職務負担」得点 14.9 ± 4.2 、「過剰な要求」得点 13.7 ± 3.8 、「同僚との関係」得点 13.6 ± 2.1 、「役割葛藤」得点 8.8 ± 2.5 であり、5 つの下位尺度得点は「同僚との関係」を除き互いに有意

な正の相関を示した。コーピング尺度の内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「消極的行動」で $\alpha = 0.797$ 、「症状対処」で $\alpha = 0.733$ 、「積極的行動」で $\alpha = 0.666$ とほぼ良好な内的整合性が見られた。3 つの下位尺度得点の平均値 $\pm$ 標準偏差は、「消極的行動」得点 19.3 ± 7.7 、「症状対処」得点 7.7 ± 2.3 、「積極的行動」得点 11.1 ± 2.8 であった。3 つの下位尺度得点は互いに有意な正の相関を示した。

表1 ストレッサー尺度の因子分析結果（主因子法，バリマックス回転後）

質問項目	因子負荷量				
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
	曖昧な職務責任	困難な職務負担	過剰な要求	同僚との関係	役割葛藤
行政上の要求に細かく応じること	0.841	0.022	-0.010	0.005	0.070
地域巡回や交通指導に時間をとられる	0.806	0.079	-0.135	-0.132	0.060
勤務時間外に課外活動等の指導を行う	0.722	0.222	0.120	-0.013	0.147
専門外の仕事での細やかな役割に応じること	0.688	-0.024	-0.068	-0.104	-0.020
児童が学校外で起こした問題に対応すること	0.666	0.179	0.058	0.121	0.020
必要性を感じない研修や研究指定を受けること	0.591	0.040	-0.111	0.018	0.147
敷地外で課外活動を行う際に安全に気配りすること	0.564	0.208	0.208	0.034	0.104
本来家庭でなされるべきしつづけを細かく指示する	0.563	0.264	0.103	0.067	0.071
今までに経験のない活動を企画し実施すること	0.454	0.249	0.128	-0.043	0.180
学級や児童会を通してまとまりのある集団作り	-0.003	0.847	-0.045	0.063	-0.048
自主的に研修や能力向上の機会に取り組むこと	0.182	0.750	0.044	-0.062	0.046
児童に最低限の学習レベルを確保すること	0.036	0.729	-0.030	0.023	0.215
児童との会話や細やかな指導を充実させること	0.172	0.711	0.163	0.063	0.041
家庭や地域と協力できる環境づくり	0.242	0.651	-0.038	0.074	0.185
学習指導以外で児童と会話する時間を確保すること	0.229	0.573	0.190	-0.081	0.085
児童が入学や進学する際に適切に指導すること	0.229	0.487	0.165	0.311	0.092
同僚から期待や要求をされることが多い	0.009	0.227	0.741	0.045	0.171
児童から期待や要求をされることが多い	0.029	0.065	0.740	-0.057	0.079
上司から期待や要求をされることが多い	0.098	0.045	0.737	-0.035	0.223
保護者から期待や要求をされることが多い	0.122	0.076	0.699	-0.092	0.084
同僚から自分の仕事について干渉される	-0.155	-0.101	0.679	-0.109	-0.017
職場の中で上下関係について気にしないといけない	-0.091	-0.023	0.568	-0.185	0.149
児童の立場か教師や学校の立場を優先させるか迷う	0.224	0.182	0.529	0.016	0.314
職場環境は計画したことが効率よく実行できる	-0.111	0.010	-0.110	0.843	0.051
職場環境は他の先生と仕事調整ができる	0.091	-0.023	-0.134	0.842	-0.055
職場環境は目標や方針がはっきりしている	0.035	-0.031	-0.093	0.814	-0.002
職場環境は様々な意見から納得いく決定をしている	-0.093	0.104	-0.240	0.754	-0.089
職場環境は自分が役立っていると感じる	-0.001	0.109	0.108	0.673	-0.167
普段のやり取りの中で矛盾した要求を受ける	0.194	0.024	0.275	0.078	0.770
不十分な設備や情報で仕事をしなくてはならない	0.075	0.204	0.173	-0.120	0.740
職務を果たすのに適切な援助がない場合が多い	0.091	0.196	0.259	-0.043	0.708
職場環境の方針と自分の考えが矛盾している	0.199	0.066	0.104	-0.168	0.694
寄与率(%)	13.7	12.4	12.1	10.8	7.9
累積寄与率(%)		26.1	38.2	49.0	56.9

表2 コーピング尺度の因子分析結果（主因子法，（バリマックス回転後）

質問項目	因子負荷量		
	因子1	因子2	因子3
	消極的行動	症状対処	積極的行動
そのことを考えないようにした	0.690	0.096	-0.031
仕事が全てではないと思うようにした	0.638	0.044	0.123
趣味やレジャー（音楽や旅行）をした	0.627	0.285	0.021
そのうち何とかなると楽観的に考えた	0.578	0.218	0.088
そのままにして様子を見た	0.571	-0.042	0.098
その責任は自分以外にあると考えた	0.546	0.003	0.045
この問題とは別のことに没頭した	0.397	0.346	0.139
職場を離れたら職場のことは忘れるようにした	0.338	0.124	-0.048
おしゃべりをした	0.307	0.274	0.271
休息をとった	0.046	0.833	0.146
親しい人（友人や家族など）と時間を過ごした	0.413	0.615	0.112
睡眠をとった	0.139	0.584	0.127
この状況を一つの試練と考えた	0.074	0.242	0.773
この問題は将来何らかの役に立つと考えた	-0.046	0.317	0.719
その問題と直接関係ない友人・家族・職場の人に相談した	0.288	-0.119	0.422
この状況で自分にできることについて考えた	-0.085	0.057	0.371
寄与率(%)	17.9	12.3	10.1
累積寄与率(%)		30.2	40.3

表3 部活動経験別のストレス得点の分散分析

		中学				高校				大学			
		人数	平均値	SD		人数	平均値	SD		人数	平均値	SD	
曖昧な職務責任	所属なし	22	24.0	6.3	n. s.	41	24.6	6.2	n. s.	41	23.9	6.8	n. s.
	文化部	11	27.0	4.6		18	25.4	4.7		25	25.0	5.0	
	運動部	67	24.2	5.5		41	23.9	5.5		34	24.7	4.5	
困難な職務負担	所属なし	22	15.7	4.3	n. s.	41	14.6	4.3	n. s.	41	14.9	4.5	n. s.
	文化部	11	16.3	4.1		18	15.3	3.6		25	15.1	4.0	
	運動部	67	14.5	4.1		41	15.1	4.4		34	14.8	4.1	
過剰な要求	所属なし	22	15.4	4.7	*	41	14.7	4.4	n. s.	41	14.0	4.2	n. s.
	文化部	11	12.8	2.8		18	13.1	2.6		25	13.9	3.3	
	運動部	67	13.3	3.4		41	12.9	3.3		34	13.1	3.5	
同僚との関係	所属なし	22	13.2	2.2	n. s.	41	13.5	2.1	n. s.	41	13.3	2.0	n. s.
	文化部	11	14.9	2.0		18	14.1	2.1		25	14.3	1.9	
	運動部	67	13.6	2.0		41	13.6	2.0		34	13.6	2.2	
役割葛藤	所属なし	22	8.9	2.7	n. s.	41	9.0	2.7	n. s.	41	9.2	2.9	n. s.
	文化部	11	8.4	2.1		18	8.3	1.8		25	8.6	2.4	
	運動部	67	8.8	2.5		41	8.7	2.5		34	8.4	1.9	
							*p<0.05		n. s. : not significant				

3. 属性とストレス尺度、コーピング尺度との関連

(a) 部活動経験（表 3、表 4）

運動部、文化部、所属なしの 3 項目に分け、部活動経験別にストレス尺度およびコーピング尺度得点を比較したところ、ストレス尺度得点については中学の周囲の過剰な要求において分散分析で有意差がみられたが、多重比較では有意差はみられず、その他においても 3 群間に有意差は見られなかった。コーピング尺度得点では、中学校での部活動経験において、運動部、文化部に所属していた者の「積極的行動」得点が高く、多重比較でも「所属なし」と「文化部」($p < 0.01$)、「所属なし」と「運動部」($p < 0.05$)の間で有意な差がみられた。また高校での部活動経験においても、運動部に所属していた者の「積極的行動」得点が高く、多重比較でも「所属なし」と「運動部」($p < 0.05$)の間で有意な差が見られた。大学の部活動経験においては 3 群間に有意差は見られなかった。

表 4 部活動経験別のコーピング得点の比較

		中学				高校				大学			
		人数	平均値	SD		人数	平均値	SD		人数	平均値	SD	
消極的行動	所属なし	22	18.77	5.51	n. s.	41	19.44	5.60	n. s.	41	19.24	6.30	n. s.
	文化部	11	19.27	5.12		18	18.67	5.51		25	19.48	4.43	
	運動部	67	19.48	5.36		41	19.44	5.06		34	19.24	4.76	
症状対処	所属なし	22	6.45	2.13	* a	41	7.17	2.26	n. s.	41	7.17	2.52	n. s.
	文化部	11	7.73	1.95		18	7.78	2.80		25	8.36	2.06	
	運動部	67	8.16	2.32		41	8.29	2.09		34	7.97	2.18	
積極的行動	所属なし	22	9.55	2.81	**a, b	41	10.20	2.68	* a	41	10.49	2.86	n. s.
	文化部	11	12.55	2.21		18	11.28	2.67		25	11.40	3.01	
	運動部	67	11.30	2.65		41	11.80	2.71		34	11.47	2.40	
			a:なし-運動 b:なし-文化				*p<0.05 **p<0.01		n. s.: not significant				

(b) 主将・副主将経験（表 5）

中学校、高校、大学を通した主将・副主将経験の有無別にストレス尺度とコーピング尺度の下位尺度得点を比較したところ、経験が有る者の方が無い者よりコーピング尺度のうち「積極的行動」得点が高かった ($p < 0.05$)。

表 5 主将・副主将経験とコーピング得点

	主将・副主将経験	人数	平均値	SD	有意確率
消極的行動	あり	36	18.8	4.1	0.465
	なし	64	19.6	5.9	
症状対処	あり	36	8.0	2.0	0.405
	なし	64	7.6	2.5	
積極的行動	あり	36	11.9	2.3	0.015*
	なし	64	19.6	2.9	
				*p<0.05 **p<0.01	

4. 相関関係（表 6）

教職年数は「過剰な要求」との間に正の相関が見られ、「困難な職務負担」、「症状対処」、「積極的行動」との間に負の相関が見られた。

「同僚との関係」は「症状対処」、「積極的行動」、「消極的行動」の3つすべてのコーピング尺度得点との間に正の相関が見られた。「曖昧な職務責任」、「役割葛藤」、「困難な職務負担」は「消極的行動」と正の相関が見られた。

表 6 相関係数

	困難な職務負担	過剰な要求	同僚との関係	役割葛藤	消極的行動	症状対処	積極的行動	教職経験年数
曖昧な職務責任	0.403**	0.175	0.148	0.316**	0.267**	-0.008	0.010	0.141
困難な職務負担		0.259*	0.080	0.350**	0.212*	0.068	0.037	-0.198*
過剰な要求			-0.005	0.505**	0.165	-0.120	-0.010	0.207*
同僚との関係				0.089	0.204*	0.356**	0.634**	-0.134
役割葛藤					0.175	0.052	0.092	-0.041
消極的行動						0.436**	0.200*	-0.125
症状対処							0.322**	-0.286**
積極的行動								-0.367**
							*p<0.05 **p<0.01	

4. 考察

部活動の目的としては、自主性、協調性、責任感、連帯感などの育成が挙げられている。今回調査した小学校教員の部活動経験については、中学校時が一番多く、高校・大学に進むにつれて部活動への所属が減少していた。とくに運動部への所属が減少し、文化部では増加していた。文部科学省の運動部活動の在り方に関する調査研究報告⁷⁾においても同様の傾向が見られていた。

今回の研究では、中学で文化部や運動部の部活動に属していた人の方が部活動に所属していなかった人より、現在のストレスには差がないにもかかわらず、コーピングにおいてより多くの「積極的行動」や「症状対処」をしており、中学、高校の運動部活動経験者では文化部や所属していなかった人より「積極的行動」のコーピングを行っていた。上野ら⁴⁾は中学校や高校で運動部の参加している生徒の方が全く参加していない生徒よりライフスキルをより獲得していたと報告しており、運動部活動が効果的なストレス対処能力を獲得する機会となっていたと推測している。Shaw ら⁹⁾も、音楽や趣味活動であっても、それが挑戦をもたらし、努力が必要な活動であれば、ポジティブな影響を与えると述べているように、運動部のみでなく、文化部所属経験者においても「積極的行動」得点が有意に高いことから、クラブ活動内での人間関係形成の経験が、ストレス対処を行う上で重要と考えられた。

このように中学校や高校での部活動経験は問題解決型の「積極的行動」というポジティブなストレ

ス対処行動を促進させ、そのことが教師になった後のストレス対処として積極的なコーピングが用いられる要因として考えられた。

今回の調査では、中学校から大学までの部活動の中で主将・副主将経験がある人はない人に比べ、より「積極的行動」のコーピングをするという結果が得られた。主将・副主将という役割は、普段の部活動の中心となり、目的を達成できるように運営すると同時に、部活動全体を見渡し、部活動の雰囲気を作ったり、部員を鼓舞したりというような部員に対する対応と共に、顧問の先生やその学校の代表として様々な人と関わる立場にあるため、ストレスを多く感じやすいと考えられ、部活動を良い状態に持っていくには、消極的なコーピングのみでは効果が得られず、積極的に対処せざるを得ないと推測された。吉村の研究¹⁰⁾では、主将が積極的な行動をとり、「主将は厳しい」と思っている部員は、部活動への積極的な行動が高く、部の雰囲気にも満足しているという結果が得られている。このことより、主将・副主将経験がある人では、部活動での積極的な働きかけによるコーピングの経験が多く、その経験を教員になってからも生かしていると考えられ、主将や副主将を経験することが、その後の人生における有効なコーピング能力につながることを示唆された。

教員のメンタルヘルスに関する西田ら¹¹⁾の研究では、ベテランの方が若手よりもQOL得点（生きがい度）が有意に低かった。本研究でも同様に、「教職年数」が若いほど「積極的行動」のコーピング得点が高く、ベテランであるほど、周囲からの「過剰な要求」のストレス得点が高いという結果が得られ、若手であるほど積極的なコーピングをする傾向があると考えられた。教職年数が長くなるほど与えられる仕事の量や役職が増加し、結果として様々な方面からの圧力がかかることが原因と考えられ、多忙な中でストレスを発散するには時間的余裕がなく、実施が難しいことも要因と考えられた。

学校での職務ストレス場面における対処方略を研究した若林の研究¹³⁾では、「職員間の関係」において、「情緒調整型」・「問題対処型」・「問題回避型」など多くの対処方略を行っており、とくに「問題回避型」の対処方略が多く用いられていた。今回の研究でも同様に、「同僚との関係」のストレスサーが、全てのコーピング尺度得点との間に有意な相関関係が見られ、「消極的行動」と多くのストレスサー得点との間に有意な相関関係が見られた。このことから、「同僚との関係」のストレスを多く感じるほど多くのコーピング行動を行い、多くのストレスを感じるほど「消極的行動」でコーピングする傾向があると考えられた。これはストレスがあまりにも多い場合あるいは解決が困難な場合には、その問題から逃げる対応をとり、問題解決を先送りしているうちに対応しきれなくなり、精神的に病んで休職する可能性が示唆された。「消極的行動」のみによる対処では問題の根本的な解決にはつながらず、教員研修等で効果的なコーピングについて指導することが必要と考えられた。また、今回の結果で、ストレスサーの下位尺度得点間、およびコーピング下位尺度得点間で有意な相関がみられたことは、1つのストレスサーは他のストレスサーの感受性にも影響しており、コーピング方法についても1つのコーピングのみでなく、複数のコーピングを用いている可能性が考えられた。

データは示さないが、中学校から大学までの運動部に所属していた者で比較をすると、大学に上るにつれて、ストレスサー下位尺度間の相関が少なくなり、ストレスサー尺度得点とコーピング尺度得点との相関が増えていた。安田ら¹⁴⁾の大学生と高校生の運動部員を比較した研究では、大学でも運動部活動を続けている大学群は高校群の部員よりもスポーツ場面や日常場面における自己効力感が高かったという結果が得られている。大学生と中学生を比較した研究¹⁵⁾でも、大学群の方が中学群よりもスポーツ場面のみならず日常場面における自己効力感も高かったという結果が得られている。従っ

て、運動部活動の経験が長いほど、自己効力感を感じ、ストレスを感じた場合には、多くのコーピングを用いてより効果的な対処をしているのではないかと考えられた。運動部所属者では運動そのものでもストレスを解消しており、就職後も何らかの運動を定期的におこなっている場合には、さらに効果的なコーピングができていた可能性が考えられた。

本研究では、小学校教員を対象としたが、調査人数が少なかった事、回収率が低かったこと、研究に協力的な学校のみでの調査であったことなどのバイアスがあり、今回の結果を一般化することはできない。今後は、対象者の選定方法やアンケート項目についても十分検討する必要がある、小学校にとどまらず、中学校や高校の教員に広げていくことで、より確かなデータが得られると考えられた。

今回の結果から、部活動に所属していた人はコーピングが適切に行われる傾向が見られた。しかし、アンケートに答えることができない状態の教員や消極的なコーピングをしている教員に対して今後どのように対応していくかが問題になってくるであろう。教員に求められるものは将来的にますます増加し、より多くの重圧がかかることが予測される。その環境の中で、ストレスに対して、より効率的なコーピングを行うことは極めて重要なことであり、教員ばかりでなく他の職種でも同様と考えられ、今後更なる研究がされることを期待する。

5. まとめ

京都府下の小学校教員を対象として、アンケート調査によりストレスおよびコーピングと部活動経験との関連について検討を行い、以下の知見を得た。

- 1) ストレッサーについては部活動経験で差はなかったが、コーピングでは中学では文化部、運動部が所属なしより、高校では運動部の方が所属なしより「積極的行動」得点が高かった。
- 2) 部活動経験の中で、主将・副主将を経験した者は、していない者よりも「積極的行動」得点有意に高かった。
- 3) 教職年数が短いほど「症状対処」や「積極的行動」などのコーピング得点は高かった。

引用文献

- 1) 文部科学省：教職員のメンタルヘルス対策について（最終まとめ） Available at: http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/03/29/1332655_03.pdf. Accessed September 30, 2013
- 2) 群馬県教育委員会・(財)社会経済生産性本部コンサルティング部『教員の多忙を解消する，教員・学校・教育委員会ができる業務改善』学事出版，2008
- 3) 勝俣陽太郎，東海林麗香，吉野菜穂子，下川昭雄「児童との心的距離感が小学校教員のストレス対処方略に与える影響」『千葉県立衛生短期大学紀要』27, 2008, pp. 75-80
- 4) 上野耕平，中込四朗「運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究」『体育学研究』43, 1998, pp. 33-42
- 5) 高木良，田中宏二「教師の職業ストレスに関する研究～教師の職業ストレスとバーンアウト」

ウトの関係を中心に～」『教育心理学研究』51, 2003, pp. 165-174

- 6) 庄司正美, 庄司一子「職場用コーピング尺度の信頼性・妥当性の検討」『産業医学』34, 1992, pp 1-17
- 7) 文部科学省『運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～』 Available at:
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/_icsFiles/afieldfile/2013/05/27/1335529_1.pdf.
Accessed September 30, 2013
- 8) 文部科学省『学校教員統計調査 - 平成 22 年度（確定値）結果の概要 -』 Available at :
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kyouin/kekka/k_detail/1319073.htm.
Accessed September 30, 2013
- 9) Shaw, M.S, Kleiber, D.A., & CalCell, L.L. 「Leisure and identity formation in male and female adolescents : A preliminary examination」『Journal of Leisure Research』27, 1995, pp. 245-263
- 10) 吉村斉「部活動の適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップとの関係」『教育心理学研究』53, 2005, pp. 151-161
- 11) 西田純一, 大友智「小・中学校教員のメンタルヘルスに及ぼす運動・身体活動の影響・個人的特性およびストレス経験を考慮した検討」『教育心理学研究』58, 2010, pp. 285-297
- 12) 後藤靖宏, 田中妙: 「女性教師ストレスの特徴 — 小学校・中学校の場合」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』23, 2001, pp. 127-136
- 13) 若林明雄「対処スタイルと日常生活および職務上のストレス対処方略の関係」『教育心理学研究』48, 2000, pp. 28-137
- 14) 安田貢, 遠藤瞬郎, 下川浩一, 布施洋, 袴田敦士, 伊藤潤二「大学生の運動部活動に関する回顧調査」『教育心理学研究』51, 2003, pp. 165-174
- 15) 安田貢, 遠藤瞬郎, 下川浩一, 布施洋, 袴田敦士, 伊藤潤二「大学生の運動部活動に関する回顧調査 — 中学時代のストレス, サポート, 自己効力感に注目して —」『教育実践学研究』14, 2009, pp. 95-105